湖月抄

みをつくし

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

7152

澪標 細 巻ノ名以テ哥ヲ号之 河 みをつくし恋ふるしるしにこゝ
までもめぐりあひけるえにはふかしな 細 此巻ハ源氏
廿七歳の明石より帰京の年より源年廿八歳の十一月
までのことあり廿七歳ハ明石の巻の末にて同年なり蓬生
廿八歳の八月迄のことをしるす如何 哥 孟曰

さやかにみえしゆめの
河 清 徐亮 明 鏗鏘 日本紀
さだかとあかなることばなり
あかし巻之 細 源夢に見え
給ふ三月十三日の夜の事なり
見え
いかでかのしづみ給ふらん
細 明石巻に云 これハ院よりの
御たゝりにあらず
うたがひのなからんやうにかくれ
がたのつみをすくひ給ふとまで
くるしみの古院の源の御夢
よつぎにあらはれ給ふ 孟曰
神無月 細 花鳥 寛平の御
記とひろり 明 寛平元年
九月に古院光孝と号三之
あかしては八講行はれしにやあ
またみかどありけるにも哉
例ありけるをとて云るなり
花 寛平ノ御記云寛平元年
九月甲辰依御忌有被行
八講之事 朱雀帝遷化ノ後
諸公子 劉 當果行事也
説云子 即任意遊猟不勤訟事ヲ

さやかにみえ給ひし夢の後は院のみかど 桐壺之院の帝なり
の御ことを心にかけきこえ給ひていかでかのし 河二義し
づみ給ふらんつみすくひたてまつることをせ 源之
んとおぼしなげきけるをかくかへり給ひては 細 源の思召のおもき之所也
その御いそぎし給ふ神無月に御八講 の給ふなり
し給ふ世の人なびきつかうまつること 細 源よりのことく人のつかうまつる之
むかしのやうなり大后御なやみおもく 細 弘徽殿之
おはしますうちにもつひにこの人を
えけたずなりなむことゝ心やみおぼし 細 源之
けれど御門は院の御遺言をおもひきこえ 朱雀院ハ之 忠言
給ふものゝむくひありぬべくおぼしけるを
なほしたてゝ御心ちすゞしくなん

可謂不忠不孝甚著也云々　抄 大后の病中にも源氏をつゐにえけたずなりなんと心やみおぼす

物のむくいありぬべくおぼしけるを　細 帝ハ古院の御遺言を思ひて悪しくせられバとおもひ給ふ

なほしたてゝ　哢 帝の御心に源の御事の報ありやと思して悪をも善にかへ給ふ心也

御心地すゞしくなんおぼしける　孟曰 帝ハ古院の御遺言を背かせ給ひしかバ御心のうちやすからず思召しに

今ハ源をなほしたて給へバ御心すゞしく思召也

時々おこりなやませ給ひし　細 何事につけても御心ハすゞしくおぼしけると也

明石の巻にあり院の御夢の事也　孟 御心地すゞしくのみおぼしけるに

よりて御目もさはやぎ給ふと也　細 位

おりゐさせ給はん事とおもほしめす也

時々おこりなやませ給ひし御目もさはやぎ給ひぬれど、おほかた世にえながくあるまじう、心ぼそき事とのみ、ひさしからぬ事をおぼしつゝ、常にめしありて、源氏の君は参り給ふ。世中の事なども、へだてなくのたまはせつゝ、御ほいのやうなれば、おほかたの世の人も、あいなく、うれしき事によろこびきこえける。おりゐな

花宴の内侍を源もしのびて大后のおなじ

よりみえしかバ心ぐるしくおぼす也　細 花宴よりの事也　細 内侍の督

内侍のかみ心ぼそげに世を思ひなげき給へる

孟 源の大臣ハ致仕の大臣也

世のはかなくおぼさるゝ

孟 清濁義儀之例あり

んの御心づかひちかくなりぬるにも、内侍のかみ心ぼそげに世をおもひなげき給へる、いとあはれにおぼされけり。大臣うせ給ひ、大宮もたのもしげなくのみあつい給へるに、我世のこりすくなき心ちするになん、いと／＼おしう、なごりなきさまにてとまり給はんとすらん。昔より人にはおもひおとし給へれど、みづからの心ざしのまたなきならひに、たゞ御事のみなん、あはれにおぼえける。立まさる人、又御ほいありて見給ふとも、おろかならぬ心ざしはしも、なずらはざらんとおもふさへこそ心ぐる

女君ハ源ハいとおもく
孟弄花之師説の心
りさまをのこるくまなくかたりて
あらはのつゝみとれ
細露の葉こき給ふ
孟勝の気数をくだしる
まいりやうのおもむき
ゆゑなくしらし

しられとて、うちすさみ給ぬ。女君ハ御いらへ
もなく、うちゑみて、御かたはらのあはれなるを
みて、涙をこぼし給へるあはれにて川のつまゝ
にまぎれて義をならひつゝとゝめられんとなんおぼしける。
細義給ぐ なをしうもこゝろよくまかりさぶらふまじき。
ちかしうをあはれちぎりわりなきひとへの
こゝろにほだし今はとて給ひてんと思ひなるも
此世ながらわかれたてまつりびとゆくべきこ
ころなむしるべき、いくつ思ひのこす思ひのこ
源をもすてまつらいとゞつゝしまれしう
もおぼしなされまちかくうつろひなばめ
しうさるくかざりけるをこれらかへぎ

今はとてまかりなん。源帝
よろこびて内子もおほし
とく
あはれなるかなとてひとしをそ
細源の御返事はつれなくて人は
ことし師説朱雀院
本の御心をかけぬ
御けてのさて

さまはらくうつろひし
細又夫の源まゆり給ぬ
ののあはれ内の源の御
いれども給ふる也師源
氏の御かへこさまを給ひ源
つかうまつるまじさ源の御心
ざしはいかならしをうかひし
勝のなく
りの思ひあはれ給ふに
細よりおほえの御かたさま
よりおぼさむるを思ひ
ころおもふくは源氏へ
るとてさまぞ朱雀院
の御心のやうにこそ御心
給ふ

しのゝめ月にそなへてまかりてえさせ給ふよ。朱雀の
めでたき月にて心にいりて内給のおほえ
そゝめされとなむ給ひしを思ひてかへらひし
よもあるさへなさけにいりのよしをしれのおもて
まなざそ我心のまくいふかゐあるさま
おそりさまは源の御心ひきおそわがな
とべさうまもいはば源へのれこまかくきん
あなし出ちるはいとうきれかなりあく
かくしのまかりくうそはの御心のかげんなく
のこさあり十一にかりおんど侍どらう
北方ニ女中もあはれうつしもそしこ源
氏の大納言のれいの侍とおもへ給はる侍し
こまんやうにおほかりいとまはゆるさせて

世をゆつり給へるまゝに申しこと
御譲國あらんとき（よ）りの給
ひしこゝせのやうに
御ゆつり 於延長のこと
ごとの御位をは朱雀 兼平の御門
つきまゐらせ其次村上 天暦の御門
八歳君子のうちこの御ゆるまゝ
て位をつきまつり此御たちも
朱雀の御弟にて立坊の
ごとくなりて御座を延長
よりおこなはるる也。
天慶九年 朱雀院 安和二年
己巳八月十三日即位十一才 冷
泉院十一才即位是よ唯
まさる給
ひとあさき爪かく 細 朱雀
院太宮へ申の御(?)之 寶算
といはるべきなりしを
えん御母后のかひて

ひとつあひなへると。世人めでたうきこゆるのに
朱雀 円 両御かたくとりおなじからず申すゆへ也
おぼゆれども。くゑいはいつとなくうつしくて
冷泉院之
こゝはおひたゝせ給へとはゞかり給ひ。らこよ
朱雀院之
とげでうしとおぼしてきこえさせ給へ。世中は
づりうしおぼしつゞけさせ給ひ。ちうこ
二月廿日あまり也
こなしも給ひ御ゆづり月の廿よ日。にてゆづり
細 御譲位之
円 譲國之
をのこしはとられけれど。此御ことを
太后は譲國を惜み給ふ之
あくそこうひろうこと御なげくもとの
どうもはらんぎりべきこと。代をしかり
とぞ申しすゞめ給ひ。坊は式ぜうさ
ぞでんのこうめ女御。世年あくいまりて。
御さう人。今めしきこともおはりけり。源氏の
御さう人

のとしの太政大臣もすゑあらくく（?）
坊の八せくさやうてんのこと
え服。若恭宗下に位よ達らせ給
御母也うせ給へ可りしられ下よみえうり
殺さざまりりく 細 左大
の大臣闕あらき也。内大臣八
令かのあるして叙位令に
戴さうる也。大織冠の時
え内大臣を右大の大臣より上
みえしらはさりしく。明一
源氏とハ左大の大臣なり也
依無闕左大のかはり内大臣
と云之 兼明親王
ことさげさたく也
細 そくとは八職之ヲさけさ
職とばしそて辞退し給之
於執政の兼よあらしきてと
て謙退して蒙上の父大臣
と摂政させられける也
らしのおとく 細 蒙上ハ文之
初めて（?）あみよ（?）り 明一勘忠一
仁公良房摂政の例ニ六十三
の年齢なれど不相違之
花天皇御元服の後もいま

孟明公の事よ二条とみたえ給ひしより去夕梅が枝はは
御返の兼香数女御 雑黒 大政大臣妹 朱雀院の女御 今上の
納言内大臣よなりすぬ。殺さ（?）まりて（?）ろく
おもなうかれば。くらうと給ありきわりや
源氏摂政し給ふべきこと（?）われど辞し給ふ
げくらのおうしとしもつうきされど。や
うのこと申させくるへきどもんとらく
不堪之
らじのみたじ。世にやうしまうさうしゆが
まうしまゐやましひよりてくてねとへ
致仕の大臣の例也
しうそもりてうせよくおいのつみもそ
ひてさうしきことなくしじとうけひきけ給
兼明のうそ也
ぞ人のくわゝもしうり。世中さうこまつう
是より先國の例なれど引て摂政の事とめたまふ 世の政
のことれたる人の也
ぬかりいふここ山に給をそうさうふおも。
給を譲しまう賢人の也

ざいきの時より摂政とこれをりへ徽辞の表をたてまつりて摂政をかへしあらため関白と称じき 天子
元服の後文禄の時摂政の例ハ清和天皇貞観六年御元服ありて忠仁公良房摂政の
詔を辞せられし例にも准じて見えたり 摂政仕大臣摂政の例清和をもて例とすることの事なり
くわしくハ例の摂政の事に 河よ委
人のくハしくしるべくりて世中しづかならぬありハ 何 漢高祖欲易太子呂后恐問留侯留
侯計曰顧上不能致者天下有四人四人者年老矣為書使辯士固請宜来於是呂
后奉太子書迎此四人四人至従太子侍四人年皆八十有余鬚眉皓
白衣冠甚偉上怪之問曰彼何為者四人前対言名姓曰東園公角里先生綺里季夏黄
公上乃驚曰羽翼已成難動矣凡此外漢家其例多之 於漢高祖戚夫人を寵して如意を
王如意を太子にせんとせし時呂后太子をおそれてこれへ張良によりて〳〵と問ひしかば張良
父子乃あひだのことなるまじハいへしもせぶらうすこし但商山の四皓とて四人乃隠士ありて高祖めせども
きかぬりのを、これど太子のことをまねきよせしかれバ高祖りしとりやおそろしかりければ
らんと張良がをしへにまかせて四皓をめして太子につけ給へしかば高祖のそのおもひとゞまりし 祖
太子やむことなきて羽翼ハもとしよりかりけるの給ひて恵帝をかりのすまへ太子をさだめられけり
しくをりつく

ひさしき八生れ
聖の字より出たるところ
よろづ詞なるべし

おきまれかしはしろうさとまるとそらに 白髪と解せしこと
いそつくへきろとこそ海こともひさかりは八
たえ久れやまひにたいりこそくし給けれ
ゐと世中らりて又おしくあ給ふ人より
さしらはしかわりまじう出ではやけまさこし

さこ臣下らせうなともおのられバ 細 役仕の人の又摂政もの例 光太后
ひそて給ひぞ太政大臣よたかりおふ清和とりも 辞退を申されし ハじまま
六十三まぞなり給ひ世中すさまじこよまり
ろハこもりぬ給しそざりくしられやざ
まへハ清ことくもまじ志つひやうま拘し給
ゐりとられうひ給とりまそて宰相中将 細 参上の兄
権中納言またり給ひの四君の流れいし乃姫 摂政 徽殿とりし
君十二またり給と同ま参りをんこくうし
づき給ひのうさこうひしゐもうふ 叙爵をたにや
まをうせくいと斗ふき海なりそくく 権中納言の子達
ま流らじもいしおやうさつぎくさかひ
いそつくまさそしげるらと源氏の中で

世の中をしずまきり 細 役仕大
臣も病をとよくこつかまひ
しうくも大りさえ光ねの時
大后おそのんのり なりせ
あうし光参居志まひ
したり
四君の 細 二条殿ぐの姫君
朧月のあひ頭中将のまき
めぬ四の君とまうり人を
あさうさごうらひ
細 御北を又おりぬ梅
の大后なりき給ふさ
ひこ君も此その字まそ
柳本の暴進もみえう
明 柳本も暴進わりそ
身のうまさとえまそこえ
孟日
源氏の中ぐは
細 御子の多さと源の
うしやそ多ふなり

大殿ばらの君は　細　夕霧
く花中此ら八大閤と大
殿といひ物ゆかり給ふぞ
むかしハ殊しも宗とする
ゆゑ之摂政太政大臣を世
の人よりくして大殿と
いふ者は雅君ともに大臣
を大殿といふ事ハわれ
二姫君の　細　葵上之誕
のきみよ付ても文字思
お給之　明次第のおれ時
もさ毎く出来より
文字くみさしに　細　文えん
葵上の母君くも母のうへ
ろひの時ハらくぞみゆく
てくわ姿くぞもこゝろ中
まこと今昔ひよ付ていハ
想くく出給之
かくさせぬなけつゝも
細　葵上ハ現在のもねとは
源の御息所をきみすること
こゝよかれハこしすりつかへと
細　人くの後くよ後て参べ
きみわりしどめでたくりく

はらしやう給ふ大殿ばらのゆかりの君ハ人よりも
ことにうつくしうて内裏の殿上し給ふ
この姫君のうへを給ひしろしげにさせ給ひしが
ちさきしまをもあそび給ひしおまげくさ
れどもかくとも名残りもつて比井らでの比ひ
かりよろづにおそすきれずてうしこゝろれ
むしまづうつすこともすまさいへ給ひな
を思ひけんかぐくうらみおもひしかど
よまうら給ひなでしつゝうき君の比めれと
生さしぬ人でもとしもこの花さそひら
さりけりハきみれさべきこともかなつよ
すかり行かんへしてもおもひたまさつらはさいへ

ひ給くば後く出る事など
師くもり給ふにまさつけ
まふべしとく
二条院みときれども
紫の上のこと源の源氏へ行
ろひのおもひ源のめしつかふ
女房と思の人よわづかなる
つり其人らく前の夕霧
のめのとさきぬんでも海
みでちらぬとおりとう
めてみるなどごとまうらき
こしりうとハいそり
二条院のひんがし方り文
細　東院と号も古院の
御むかし方よ源氏の
給ふ給く
ろもろく時なげまぐ
細　御息所ゆかりのそば等
大殿を幸らしまつる之
帝日　師御元服之ゆかり
つしなぐ之儀のよまわさ
くの志を八源氏給く
弥勝のみやく

ぐ此わりなりゆくべし二条院ゆきおはれど
ごとゆかきしけり人どおもふれなりみ
御子笑ひしてさうしの比めあくかうき給ひ
さば中将中将のいへん心は物さる
つゆつてかぎりにえらしくまたいら給ふ
てのおりきても思給ふす二条院のひんがし
なる文院の所そうふじむなかりしどかぶく
わたくあつてらせ給ふ花ちる里なども
ひっくしさひとしもを御たふやうに笑ひおて
くつくろひを給ふましくやうのわりしも心ぐ
しげなりしこといつまでと笑しますらく
時なかれどおもやけなこくしいそぎしき

三月ついたち 細 去年六月ばかりの懐妊なれば此比誕生あるべしとなり 花此三月十ケ月にあたるべし 孟六月ばかりなれば此月ハ久しくと三月に入てやうやく朔日ばかりかと也 深切なる心なり

十六日に 細 京の御迎ハ一日比と見えしかば頓てや 発日

めづらしきさま 細 女子をいへり 孟 夕霧のあればひめぎみをめづらしきと也

宿曜 孟 宿曜に御子三人 スクヨウ 宿曜師 智證大師の将来なり [illegible] 細 [illegible] 宿曜師の勘文に見えて 明花云 宿曜道に源氏の御子三人とハ夕霧冷泉院明石中宮也 冷泉院ハ帝 明石の中宮ハ后 夕霧ハ太政大臣也

まぎれにえ思すまゝにもとぶらひ給はざりけるを三月ついたちのほど此比やとおぼしやるに人しれずあはれにて御つかひありけりとくかへりまいりて十六日になん女にてたひらかにものし給ふとつげきこゆめづらしきさまにてさへあなるをおぼすにおろかならずなどて京にむかへてかゝることもせさせざりけんとくちおしうおぼさる宿曜に御子三人みかどきさきかならずならびてむまれ給ふべし中のおとりは太政大臣にてくらゐをきはむべしとかんがへ申たりし中のおとりはらに女ハ

夕霧ハ位相国の [illegible] 細 [illegible] 宿曜師の [illegible] 細流の [illegible] 冷泉院の [illegible] 宿曜の勘文 [illegible] 宿曜のうらなひ [illegible]

源の人相帝王のうらなひ [illegible] 相人のいひし [illegible] 細 [illegible] 相人のことば [illegible]

孟 当代ハ冷泉院の御位 [illegible] 源の御ちかひのくらゐ [illegible]

こゝあるべしとおもひしさしてかなふなめりおほかたかみなきくらゐにのぼり世をまつりごち給ふべき事さばかりかしこかりしあまたのさう人どものきこえあつめたるをとしごろは世のわづらはしさにみなおぼしけちつるを當代のかくくらゐにかなひ給ひぬることを思ひのごとうれしとおぼすみづからももてはなれたまへるすぢはさらに

源の心にもさとく

細 天子の位の事也 孟日

く人はおかしきそゞろ
細 古院の源氏姓を給ひし
ること古院も天子の位
につき給ふ時はおもはずき
こゝよかりしことゝ
師 源氏の弟王位に八当世
の通ことく
今の来のおくしき筆を
細 一方のうけ八皆桐人の
まへたらりうちつ今に
至後のることよありしく
給ひ 師 源氏の御子に帝
后ならび太政大臣になりし人
おゝんと云うらしにまか冷
泉院のこのこく即位に
て相人の詞八あつり夕霧
明石姫君も太政大臣后に
なりおふつきて一定なりん
とおもしく
まことの弥の[illegible]

かのまじきこくゆげんじとておほやけのみこ[illegible]
らのあるまじれてらくしきりのよれ
がしらうぢきて人にはけんじしやきそ
ぞうれしきをもりよはかすくをとこさうり宮を
まどらのうくておりまけすと
ひとのまうこともすくねど[illegible]
まゐ来のあくまごけんのうちにかりそらい
まいれ来のあくまじ[illegible]
かしのきれたるへまうしかのひとまよ
よかくたかくねもくせめくひかくし
さみやもよびなきいをつよみやあり
ん[illegible]

文にともくで明石姫君もと立后あるべしと御給く
まうちにあ人もしまゐくてならねもくせつこそ
おりしも住吉の神の[illegible]
[illegible]
人のおやしきをうひよむまれさりんい
とおしうるうけすくもあるべきうれこの
かどもくしてひえんとおわりてひんじ

をさ〳〵うちとけてまからずかの
おやの心をはゞかりてさすがに
かゝづらひ侍りしほどにいとあはれに
思ひうしろみねざめのかたらひにも
身のざえつきおほやけにつかうまつるべき
道々しきことををしへて
いときよげにせうそこぶみにもかんな
といふものかきまぜずむべ〳〵しく
いひまはし侍るにおのづからえまかり
たえでそのものを師としてなん
わづかなるこしをれぶみつくる事など
ならひ侍りしかばいまにその恩は

細 源の詞也

遊仙窟

愚案

細

源氏

わすれ侍らねどなつかしきさいしと
うちたのまんには無才の人なま
わろならんふるまひなど見えんに
はづかしくなん見え侍りしまいて
君達の御ためはか〳〵しくしたゝかなる
御うしろみはなににかせさせ給はん
はかなしくちをしとかつ見つゝも
たゞわが心につきすくせのひくかた
侍るめればをのこしもなんしさい
なきものは侍るめるとまうせば
のこりをいはせんとてさてもをかしかり
ける女かなとすかいたまふを

細 源の詞也

堪忍

細

とりかへしつべき 孟 こゝちこそすれハ乳母を我ものにせまほしく思し給ふ心也 乳
母のうへにもかくなれなれしくいはるゝを
くるしく思へるさまなり

かねてより 細 此哥ハ乳母を
へだてぬ中とならはねど
まことにわかれハおしきとなり

うちつけの 細 別れをかこつけて
我ハ御したひあるまじき事と
なり 孟 うちつけハ俄なる也
いとしと思す 師 めのとの上臈
しき詞をいとおしと思す也
めのとの京のほどは車にて
しのびていく也

はかし 孟 御はかしの事也
細 女子にもまもり刀をつかはす也
三条院の皇女の例 河海に
みえたり 河 皇女禎子内親王 三条院ノ
皇女 御母中宮妍子 大后
陽明門院是也 長和
二年七月十六日降誕 即日
被奉御剣 是其例也

いつしかも 細 ここにてハ孟青
きゝとがむべき物にたとへ 孟 引哥あり
べし 孟 天人の代ハおほき
の羽衣にてなづるとも
つきぬ巌をいふ所ハ
寿へ盤石劫とて四十里の石
を天人の羽衣にてなでつくす
を一劫といふ 其なくなるまで
のひさしき世をへてといふ
心也 姫君を祝して
いへり 女子ハ

じられれど。とかくたはぶれ給ひて、とりか
へしつべきこゝちこそすれ。いかにとの給
ふにつけても、げにおなじうは御身ちかくも
つかうまつりなれば、うき身もなぐさみな
ましと見たてまつる
源氏
かねてよりへだてぬ中とならはねど別
れはおしき物にぞありける。したひやしなまし
との給へば、うちわらひて
乳母哥
うちつけのわかれをおしむかことにて
おもはむかたにしたひやはせぬ。なれて
きこゆるを、いたしとおぼす。京の程は車に
てぞゆきける。いとしたしき人さしそへ給てゆ
めもらすまじく口がため給ひてつかはす。御
はかし、さるべき物など所せきまで、おぼ
しやらぬくまなし。めのとにもありがた
うこまやかなる御いたはりのほどあさからず。
入道のおもひかしづき思ふらんありさま、おもひ
やるも、ほゝゑまれ給ふことおほく、又
あはれに心ぐるしうも、たゞこの事の御
心にかゝるも、あさからぬにこそは。御
文にも、おろかにもてなしおもふまじと
かへす/\いましめ給へり
源氏
いつしかも袖うちかけんをとめ子が世をへてなづる
岩のおひさき。つのくにまでは舟にて
それよりあなたはむまにていそぎつきぬ

明石はまづくはてりびんのれいさきハひめ君くと云く源氏といへる袖くらう所為君の上と
も紫姫君をすぐみあらんとく

あらうさき　孟　子の個よとろ
うらよせのしとおそれしさ
ならぬく
けゆうらうさき很くまよりしつさき
こころぐんと所為しらう八むつて
細源の心うらみしつる給
もうとかりと思ひさく
あやしきさまよとそふらそ
姜のうらしつ顔もさあ
よかり　孟氏姫君の所うさ
ちとかまれハ抱き比ハ云べど
ふくく乳母んくく　師お分とえ
うきれてろうくしらく心ね不
よんでりつく歌さ　も志
ならく
とかららの君も同一ろ
明石の上も此程ハ源よ別
きんての抱きひさえなど

源の思ひをとうしけふしとふとく
孟君ハ向て入かの孫をうかく
源の心
細乳母の思ひく
孟明石の姫君を今をのれ
ゆめ
細明石の上く
石給とりよらびりしこまりさこしおうこ
と抱るしぶこるさよむさそしそうこと明石こて
ありうさき清心だらんと云ふかよいふくいつさえ
しう抱そろしきまでしたぶらごのひてゆく
志きまそう何くしう抱くすうこしさらび多
しげゆうしこきさ清くよう一づさこゆのしんと
出わしらうきむくなりふうとこいてまろ
よあやしきさうよいそくしちて姜のらく
ちうしつるげこもをさあまかりつて何く
しうらうくさえてあつるひさて出とこ
りらの君を同てんくりのかをのこぶひと云へ

よぶしりしく出がりしかば
為源のさ母くゆかりしれ
さう弥よ何するもおひる
くこむらく
れ作ろひみも　若よむと志さ
しさ人さうそでまかしし
めのとよつきてまいりし
れ使え
ひとりしてゆ　細　にやく抵
へひハ多くのかりせ明石よお
性らやうよハあきことんの
やきこそ会此よゆ給む
為く　師氏姫君を明石の
上の袖たうりよかそでんハ
幅セうきれるうけるし
公がり
ゆわりふでうりの源の清り為
ともかりとく大人ぞよ出ぬふ
だくりの袖をられの個く
さてそあされ　細　源の個く
世らのるうれ何中もおや
うふハおくざりとく飛せ
の習さこそあ思とく
おさこそあれとハおしま
姫君の出来うるんと京の

ていそくまれなららよいさうらんとも
笑しさりつゝさこれは心とそそのもとて
抱きひるすぐさめくらしきそくうらりさ為
てもつるひゆをみるうこさ母のこゝろさし
とつらさらく来りるんといひ言ひりれバ
ふくしどをとひらしさらて作ぐけて
ひとり志そてろうつハ袖の程るうよ出わふ
づりのうけをとぞまいれど出しうり。おや
志さまらく作んまくるとゆかしう出ださう。
無ぶうとふはこしらよあくりして出さく安
えあるぬとこうてあなりを給こともてそと
出りしてさうそあんまれおやまらあら

明石の上
源の役よ源といふらく
明石の上の透るすみえ
明石の上のく
明石の
細源の心
このれ給よりしえ
細紫の上え
言ふみく
りしさきりしや出丈まらんと出わりらく
源個く女役あり

紫へ[illegible]にこそあらめれと[illegible]

[illegible]紫の上の御心に[illegible]

[illegible]

こゝにはかりのやうにもなすきらんとそくたり

心もとなくて　御子なきまゝに

こゝろりとなくてとく紫上に

対して（上文）御子なくてとおもひ

かうて[illegible]

[illegible]男子の御[illegible]

[illegible]もありぬべ

きことなれど

源も[illegible]

[illegible]

やしなはれて[illegible]

[illegible]

あやしうねぢけたる[illegible]

細　紫上御[illegible]

[illegible]

なり

[illegible]源氏を

[illegible]

たるわざなりや。さもおはせなんとおも（細　紫上の御腹に御子のなき事をいふ）ふあたりには心もとなくておもひのほかにくち（明石上には[illegible]）をしくなん。女にてあなれば、いとこそもの（おぼえして源の詞なるべし）しけれ。たづねしらでもありぬべきことなれどさはえおもひすつまじきわざなりけり。よびにやりてみせたてまつらん。にくみ給ふなよ（細　紫上へ）ときこえ給へば、（孟　紫上の[illegible]）おもてうちあかみて、あやしうつねにかやうなるすぢのたまひつくる心のほどこそ、我ながらうとましけれ。ものにくみはいつならふべきにかとゑんじ給へば、

[illegible]

それとなく源をうらんじ給ふ（おそよハ）

[illegible]

御源の御心[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　源の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なり

[illegible]

花　[illegible]

[illegible]

弄　紫の上の[illegible]　細日

師　花[illegible]

[illegible]

紫上との御中の[illegible]

[illegible]

いとようちゑみて、そよたがならはしにか（細　源の詞也）あらん。おもはずにぞみえ給ふや。人の心より（心とまりて侍る也）ほかなるおもひやりごとして、ものゑんじなど（孟　[illegible]）し給ふよ。おもへばかなしとてはて／＼はなみだぐ（女[illegible]）み給ふ。としごろあかずこひしとおもひきこえ給ひし御心のうちども、をり／＼の御文のか（戯の心也）よひなどおぼしいづるには、よろづのことすさびにこそあれとおもひけたれ給ふ。（孟　誕生の事也）（孟　紫の[illegible]）（細　源の詞也）この人をかうまでおもひやりこととふは、なほおもふや（[illegible]）うのはべるぞ。まだきにきこえば、又ひが（[illegible]の上の事を）心えたまふべければとのたまひさして、人がらのをかしかりしも、所がらにや、めづらし

のすれより川にんようくつらしるすハみるなくとぶらうすそて紫よすゝぶハあさこと心あさうて
晴細の義よまさうつぶよる川のすりそみよてそして八源の君しうしと心ひいづれバ今
くうらこゑるべきうとものとこみうらうてあらと心ひあてうまやさく
ゆうつきよるてでん　細　辛へまづれよりくてまし紫上のわくも心り給べきやまく
んがらのわかりうし　細　御心上の字面も不かりよやしいひすし給く
あわれすりしゆふべのなりり　細　なりひ年すじ方にあびんの前くのなりし時のするゝ琴の
善こそ給ひし時のるすどなうり　花　明石巻よ云
源氏のうる　詞のらひハさ
らうらうとも身しか心く
なうつ一まつ、うるよまひ
ん
これハ又あすく
形見より紫のらよ心ひ
あへるすへ　紫上八歌
夕源のすみをあうけまし給
ひしよ源のまとぶうりん
きとみうりても紫の上
のかよ明石よんとか
あひうとわてんまゑ

うちながめしあどかうら睨し給ひわたる
まじゆふべのなうりひしとみじまは
すゝねどぞのこれうちなみのそしうくね
のすみめきうりしもじとてへんとも　明石上よ源の御
君にてよの給いづかかも我ハ又すくこそあれ
とふひまげさしげ、すずひまくもるとまけ
給のんへうとじてすじんふひつべきそれで我
　細　紫上のむしんじ給ふ
もられとうろさむこそすめて長なりし
世のまち給られとうひとりごとのやうにてう

あめづらう　細　紫上の前くの
ないそての煙ハ同しうさうり
わびうんの前あすどくうう給
よ悦とる煙とすくてまちハ
源を恨まふんく源と明石
よもの中の煙しりも我
こそさるぶうへなれとく
戦ふ紀ぶるあそりしとい
心よこうらねべきうく
御源の明石よ對してよ
みあするやうに也あしくる
にうびし煙よハあくびたし
もれハ心ひのなりりよて紀
まうてこてんとの心と
あふとうやんやや　孟　源詞
何よのあふぞく紫の前を
こきくとうむよのみらやとの
まつく
これよりう　細　紫上を出給
よてそ世とのがれもとてもと
さ海ぐようき法こあれ
とく咲回　孟　源の思へ又ぎく
思うるうそをそくうるすう
よ歌よみいなまうよ心紀あ

たゞげにて
　紫上
やどりあびくるとはわしさ先我ぞなき
まはさ給ぶらするまし。あすまくや心給
うや
　源　源氏
これまさり世を海山にひきかへつつ
瀬にうるまいけむ身ぞ。いぞやつくうこと
　いそ志の給ふ事を人々
らん。命こそうるひがくいとのみあれ
　人のなげきをうへあれやうるよもとなく
るさこともうく人よころとれじとも
もらびひさ川ゆへてやとてぶさうれば
こゝろまをそいきあくらせうすひすてで
　紫の上の心を案じて云
のしらうてまへどよのもぐれさりりひ
ねうさうゆや。でもかれ給つむ。いつて此わと

いぬかのうちありしきことゝ
いそ人てなんかん　細 宿曜とは八令なり人にうらやまれて…
…いそ…
ぬしのかたへ…
のよしなれとも
細 明石上の程を思ひ給ふ
おもはれたる…
まうけざる事

いかには　河 五十日 花 明石姫君三月十六日に誕生。五月五日八五十日にあたるなり
細 五十日の祝也。三月十六日より五十日にあたる也

我御宿世も　細 明石姫君
の生れ給ふにつけて我御すくせもかたほなりと
おぼしめす也。花 此姫君をうみ奉る
事の御宿世の事をいひ…
かならず其日たがへず…
たいめんありて
細 五月五日に來つくべき
やうにと仰せらるゝ也
海松や　細 海邊の松
御とぶらひ也。海松を…
細 不變の松に比しておなじ
あやめの五十日にあたる…
思ひ立給ひね
さりともうしろめたき
事はよもあらじと也
いさゝかもうしろめたくは…

みこゝろのうちにやむごとなきかたのよしさ
すゞろにいとほしきわざなりけり思ひへし
とて給ふるが御心のうちやうやうおぼしいで
さらにおぼしあはする事どもありけり
けがらひを。五月五日にぞいかにはあたるらんと
人しれずかぞへ給て。ゆかしうあはれにおぼし
やる。何ごともいかにかひあるさまにもてなし
うれしからまし。口をしのわざや。さる所に
しも心ぐるしきさまにていできたるよと
おぼす。をとこ君ならましかば。かうしも御心に
かけ給ふまじきを。かたじけなういとほしう我御すく
せもこの御事につけてぞかたほなりけると
おぼさるゝ。御つかひいだしたて給ふ。
かならずその日たがへずまかりつけと
のたまへば。五日にいきつきぬ。おぼしやる
こともありがたうめでたきさまにて。まめ〳〵しき
御とぶらひもあり
うみまつや時ぞともなきかげにゐて
なにのあやめもいかにわくらん。心の
あくがるゝまでなん。猶かくてはえすぐ
すまじきを。思ひたち給ひね。さりともうしろめたき

いろうひも
師 なり甲装よ具とませ
まり前にも入たらひつ
たりしるすありぬ
よ海へし
公 出つらひ
花 京より出つるを
むかへのいれ結しま
てあるべきらんし

のちしく
若 源の京より
移しの乳母の俗姓をも
ありしぬもあれとし
細 氏乳母よそらぬん
とら写ありし
とろうへさりあ気付
細 ろうきる乳人かど出
住る求るがでらせ
く宜きさんへまれると
かり 咲日

こう前ありようの物かたり
孟 西白古物語又能の術
法の威光などとるう
なり

くおりしい川くら
細 氏気をまくるる
たらとさくしあなしと
いらた上ハさひおらうこと

こしはふをとかいくまへり入たる例のまち
孟 源の五十日のまでたまう世ありしを
こびちそうしてぬらうらくるなかりしい
うひも川くらいそおうしとうらかりとる
細 五十日の祝儀之
母家ふをしう川前をきさすぞむひかりけ
うらされば此れつゝひすくはやゝのよまそ
細 ?之
こそられぬべらられぬのとこの女ごゑ
のあられよかまふやうおうとうしひ人よ
てよのなぐあふしそうらおとくよとうくねそ
?上の?
人もかいよられてひゝらそあうせれ
どこまでとゝやろへさうゑやつくへひてねど
のいさ川のなすうぶめるがおうとうれる
細 氏乳母之
あじたしあれどられはらしようこめとさとうひ
巨

わかれうて前あらしの物語あらして
おろぐの表乃をあらさ海よりしぜいう道
乳母の心よまりなそく
まくるはおがらくの関ぐも女ぐらよまうう
細の心之
て限なくうりつゝそばげれうしぢわ
師 さひうりあらん
いろそらのおくうさくめうて身もいとさ
細 乳母とゆえ
のおつるくいとてゑらく
けくやうしくさひおうそうれべくゑのをつ
細 乳母の心へ入る心をらやむ
エとろうくとふそこそのうらよあられうこそ
さひの付よめでさくすくをいあうかされ
孟 うさりのい秋身よもておりされとさうぐ
細 氏父の日よりく出語よ懇紀之
りれどめのと此こしはいつよなどご爾や
つまとふくとせまつるものゝうじけるく
?の?すく
あるごくもなぐさめろうれうへしめは

数ならぬ　細 いつよりは五十日はえ人より草下の心く 師 雛や鶴によみて今日もいかにとふ人もなきさまを源の御さうらはそこひまふへくうしろやすく教ありぬ身は我なるを今日よろこびふかき人 細 哀也この文の細かなる数也 明石上の性なり又のおもひすぐるさまあらはるゝべきとそてあるきいときもかのやまよええ也のべぐるしねかわれぞ 花孟 日あはらしんやりく 細 前うまれくてはえをくすさびことたえうらまれひねとたつ御心をうけ仕後く 師 姫君をうしろやすくされりくひもがなしあはれとながやかに 孟 源の感ずる姿で也 抄 古文浦をとは後人そておもむばたゞるまゝ也

（明石上之事）かずならぬみしまがくれになくたづをけふもいかにとゝふ人ぞなき　よろづにおもう給へむすぼゝるゝありさまを、かくたまさかの御なぐさめにかけ侍るいのちのほども、はかなくなん。げにうしろやすくおもう給へおくわざもがなと、まめやかにきこえたり。うちかへし見給ひつゝ、あはれとながやかにひとりごち給ふを、女君しりめに見おこせて、うらよりをちにこぐ舟のと、しのびやかにひとりごちながめ給ふを、まことはかくまでとりなし給ふよ。こはたゞかばかりのあはれぞや。所のさまなど、うち思ひやる時〴〵、こしかたの事

細 引歌 まの浦よりをちにこぐ舟の我をばよそにへだてつるかな

わすれがたきひとりごとを、ようこそきゝすぐい給はねなど、うらみきこえ給ひて、うはづゝみばかりを見せ奉らせ給ふ。手などのいとゆゑづきて、やんごとなき人くるしげなるを、かゝればなめりとおぼす。かくこの御心とり給ふほどに、花ちる里などをかれはて給ひぬるこそ、いとおしけれ。おほやけごともしげく、所せき御身に、おぼしはゞかるにそへても、めづらしく御めおどろく事のなきほど

みだりしやうしてまします
あはりひくそそうへ
さしあつくとも
細 源氏思ふこそのこと偖さ
おかへりなんれば如何にせと
なりけり 細 花散八源の許
ひそみまそるしのうへ
されども争さろよふ
らひすふとも風流なら
根なとかしらふづさみ
うねく

月出ちろよもすめて
又月夜のあらきん月の
よ波かりふんし

づゐ絡すりらり又月夜のつまづく竹うこ
ろ出泪やけらさうしりのさ川かわりへ
出りし出きしてまうらりきてんこそるづ
らもおけられはつけらく(花散の海と)しら川よ出わけ
やりとふつらひまくとさのとみらくとくいは絡
ともろおすれはいはまめしうるろみさ
さ海よそそらく根出くまゐべきるしれはゞ
心やもけなりとしゞろよいよくあれま
こんにすゞけ出ておかりす。女洒の君よ洒袖
絡出しすてゐしのつまとくよ夜あうしてさ
らわりすてり月出わろよさしいそてぐ
えんなりはかりさひつきもをすらんてとあよ
（花散の洒不れさ海く　細 藤袁 顔の女御く　細 花散ささの意く　源の言く）

いとくつまりかれどもら
らうし　細 花散里のて
ろいさらさ海みしくらり
孟原のゆかの河とえし何くか
しそまりすく所ならる
く花散のあくさしけの袖を
しともその海なうらけ泊対
如くつらぬれしさし
なかあさよ　細 花散里の
なくな偲そらく源のとひ
まよき月よ照しろらけり。
早下のこ家出家のかりうら
ろうし 孟暁同。所 源鶏の
一し念この真ともりさ
なるりし世　細 源鶏よそ
どうるるへく
あそく契るまなうしはま
まねんもまりめべき袖
とうくしらとなと顔ふん
よいろうされ尤さへおゐ海
しきまとも奥へいひのづ見
所うへの気ありとへ袂すら
ぬ人もとぶつさらやと
さりされ給く

いとくつまりかれどもうつしもつうるがひ給
げろま海なりくらのどやうふつく押し給けく
ひいとめる そしらるなのいとしくうる
さらる代
（花散云）らかなでなしわがみりさ代そいかいてあれ
うかもしよ月をしれまし。いてこうらりしう
いひりうまするぞとうりくまもそてうつき
世られ。うろしそかく多あらろしまれ
しかりと
（源云）どしなへてらくをらるなゐまかちらば
うくの気かりつらもこそいいれくしろめ
さうとへ方ばかとく小堂のまへど。おどろいし
（細 源のれんじ所 出ル上 花散 何し提）

うれとくよきてあへど
抄 源の男女のうへひとつれバ
あらすも何かもやうにはるさ
ぢよふ海よハゐとざりよの
かひみせしと花散里の本性
さやうのかたくしとさ新よ
てハおもしと源のおもわとひを
やさてこゝろてせうり誹勝
の詞なし
そくうろくかみを 細 須磨の
巻よありしあせ 孟ゆき
めうりつるまこるむへき月
新の秀ぞしんりしん毛子
ながめそともを海の巻よ
源のことませかうして
あどそてさくへわろくしと
細 花ちる里のへて源の志
づを絵しすと第一の思の
やうに思ひしどもし海京の
物もうきさ身もそへ封筒
もなくて聞しなげゝし
さ方のとと 弄同 師 花散
細、

きもちらなどこそはしきされんらへよいわら 源氏の君之
ど、年比ねびもていまするまゝ 源の君近侍之
まどろうもハ笑されざりけりそくるゝ
ごめそとしきのめやしの絵しあらのこくも
の絵さく。おとそてこくひすくしとらうじ
う物をせひきそうんかさきえうしくハ御身
じなげり。てよてそとの絵へおも。たい
らうよらうげなり。例のいつきの御えの
紫よあらんつきをぞれてうしひあつくさ 孟 源氏之
めでし絵なうの人つれどふもうの女をしを 源氏をする 師いう方そ
描じひもれもおきさそてしのなくるよ 左へ人々
うけまへ、いしくさいしきそててえますぐ 源の男君きこえ

はしまうぬ術く。花散里
の性なり 孟同
女ハ物がたひすゝぬを
細 女ハ男のあへ源よハ
んをとゝうめし
紫ハよろ例よ 字の叔
大弐ハ大弐よしもとう依ん
まじりし大弐ハ源よへの
とゞりてこゝろ人よおもん
とハそをあらし 細 大弐
さう人のこゝろを
ところのへをつまへて字給
人をむかへこゝハ本人の
うしろとうてせがれし 明暖
師 此前後のへハかんの娘衣
まづとひくへあつごの依よ
や花は字はずにありもか
本ゝくぞおみれおどの新の
人くどつとして本よのうち
こゝもとえんく
此院乃ハくしゝ海
細 二条院の基西廓あつる
ハそうつべきことこ此院ハつ
くりなるのめづらしきる

まゝ絵なれど。女ハ梅ひさしめでたくやうろ 細 源よりの絵どもとゝむる
川よ至ひつくしもあれど。ほへんと絵
そうしよりたうやもれをつくしてそ 細 東の院之
え。ゐかうのひとつどへてもおふ海ようしへ 人
さおなべき人もいそもの絵つがうたまふ
のうそよりし笑演の説のてりぎ海 花 これハ二条代の造作のこと
まあくそでくろ御家く今めかしうしあの
むかうやうなじとえらておもしろくまのよ
須し絵つけのりん乃左代え花くなら 勝のかた
さらし絵つどこけも海よしろくつる仏ん 勝ハ左をき のことかひかくに一ものく
ぞへもあれど。女ハうるさまにこちまそ。昔乃 源の給ひ
やうよもあひ花くしまえて絵いらも。中らく

御くんにあつくのまくらとつくへし　孟子曰
うしあつむらかゝり　細　こたちのたまふとも後て遠ざからるゝ也　孟子曰　花　変ずるに人を
ありてごう切にて門くまとをめて。まくらすなるまて。遠因妻をさがの門もく
あらかくいちりくなり
こうも殿よ　うらきよにあくちあるに主加へし人かくらくる世中しも海へて
おく所あり　朱雀あり多くの人は今ハあけられ種の表つきそひて。そらしせ世は常く勝も
やさきれ好みあらず

更衣の御母北の方
細　大納言の北の方
勝月殿に竈を奪はれ給
しけり
くひきさうえへかそくさ
細　更衣とからるゝのまゝ
或は今何くとはそ禁
中にまうしすく
このあくの御との母のハ
細　後の事后八相違なり
并　注京家別数によりて

まうりりますくいつてそ
も便宜にもきさめへし
ちうどもりと八源氏の作ざ
こし相牽しを乗つけてち
そうをすてうつてうりわう
うも也
入る辰のたえ　細　尼ゆてもし
すせハと文字を存ぜず
二ありの位べきうらねど
封戸なりと申すせ
義先るよみくうり
花女院ハ御位につき
うまりらく位へなり給
小一条院あどとぞ太上
天皇の号と八中ち付く
を但封戸年官年爵
あど八巻是もわけ也ハ
ぞ　ハ予〆ハ御付く院封
く八封戸也三宮ハ各千五百
戸なりと太上天皇にまで
ぞらくく二千戸給り
まかんし院司八女院ハく
のすつうさとり判官代主
典代年くし河李朝の太上

所きうさえりぐう世中も海浮さう院々のど
やうよ好みしなうけてどちゃくよつけて而い
さはあさひのあるしこのあしげあるくおりつま
て。女御更衣これまいのごとくあひまつてに（細　院によりて）
更衣のはうく女御のこゝろよりさてくと
きめうき給ことまでくえんのくさを御好み
えにあそしけしれまゝうしてかりくかさい
びんめでしうくされさいこいかくそるれあらく（朱雀院の方に八御入らそ）
更衣にまかいるらもそ
更衣まるもひしきそりのあるるこの御いくるよ
はよのある所ハむかしのたいげいりきたりけり（もとうり僧の中）
つぎにまき更衣ハはゞかりもせずいハいちう
のれこうてもせゞよもあかるとどるらり
くしひろくやをとそうしりそなり給入（細　更衣を）
こさいの更衣ハいるあおんのなり
すゝくねハ太上天皇となるなどしくて（封給）
海まうひゝみんしともなりてご海と（院司　河香　成）
ともいうくしうれどとこるすひくろ（是御ひ厳主なるく）（功）
こゝをつらのはいりしをすうらかてぬよ
ますとしは世よまちくうりていそいり（冷泉院とし）
をとりくそでもまるら給らねどいつと（薮つかの兄）
くあめしりようよ当りらそて海して（只今冷泉の時代）

天皇ハ持統天皇よりくだりて女帝也。東三条院延喜以後の例なれども入道の宮の薄雲女院
の女院号ハ持統天皇の例よりぞ。東三條院、正暦二年七月一日院号・依為国母也
トしぜまだおりゐ給はずして　朱雀院の御代より二条の太政大臣悪后のよしの事ども御うたがひありてなど
産ハ世をのがれて内裏の出入もかなはず。冷泉院とも見えなかりしが、たゞいまの御ありさま
みなくハとゞまりてありける
細　悪后ハ源をとがめられけるゆゑ思ふまゝなり。源ハ又うらやみて后
をうらめしく思ひ給へるよし
よろづにつけて
人もやすからず
嘆悪后の心を世人のうらみ
ぬるよ。源の心にまかせ
給へるを見えうる事多くて
細　世の御中ハ定めなきことの
ならひと后のあまりなるを
まで思ひしをとゞめ源の
御心をそへつゝとく今
とぶらふ
兵部卿のみこ　細　源の公大
との御へだてハ須磨の時
世の根をばとがめて給へ
と源をうらみ思ひ給へれ
ば兵部卿の宮ハも
日のうちに

はまうでし給ふもいとめでたければ、藤壺源の御威勢みえぬれば
いうさきものハ世なりけりとなげき給ふ。悪后ハ
源氏之
おとゞハことにふれて、いとはづかしげに
つかうまつり、心よせきこえ給ふも悪后ヘ
なか／＼いとほしげなるを、のたまふ何かしくいとしあたなく
人もやすからずきこえけり。
紫の上の父之
兵部卿のみこ、年ごろの御心ばへの
つらくおもはずにて、たゞ世のきこえをのみ
おぼしはゞかり給ひしことを、おとゞは 源氏の心
うきものにおぼしおきて、むかしのやうにもむつび
きこえ給はず。なべての世にはあまねく 源氏人をやうくしき人なれども
めでたき御心なれど、此御あたりハ 兵部卿の宮へハ
なさけなきふしもうちまぜ給ふを、入道
の宮ハいとほしう、ほいなき事に見た 薄雲の御兄弟之
てまつり給へり。世中のことたゞなかばを よのまつりごと
わけて、おほきおとゞ、この大臣の御まゝなり。葵の父之　源氏之
権中納言の御むすめ、その年の八月に [illegible]　入内之
まゐらせ給ふ。おほぢ殿ゐたちて、ぎしき 葵の父太臣之
などいとあらまほし。兵部卿の宮の
中の君も、さやうに心ざしてかしづき 入内の心ざし之
給ふ名高きを、おとゞは人よりまさり 名高くきく　源氏の心之
給へとしもおぼさずなんありける。いかゞし
給はんとすらん。その秋すみよしに

紫上の父宮もはなやかに住給へるを見給ひ
ぬ様をとがめ給ふ　花散里
の御例からひの時兵部卿宮ハ
紫上へさえ見えつかうまつりし
と源のうらみ深かりしと
世の中のまつりごとを
孟　執政臣二人例　寛平九年七月三日権大納言藤原時平権大納言菅原道真
言右近大将菅家先帝詔
参つかさどる　奏請之
改権大納言藤原朝臣菅
原朝臣可奏取請之上
延喜十五年十二月
三日入納言源昇藤原
道明已上宣旨可奏許
雑書　河海
権中納言の御むすめその
年の八月に　冷泉院元服の
年入内し弘徽殿女御は此
年十二歳母ハ四の君腹也
四の君腹也
兵部卿の宮の中の君
細　紫上のいもうと也二人ハ

系圖によし 此中宮八条のいもうとくらも也 舞黒ちねの方と一腹に三人 姫君有
一人ハ丹中の宮とさゝれど今一人ハ系図にもみえず 此同腹のいもうとなるべし 一人
あるべし 師実の上ハ按察使の大納言の女の腹なれバ別腹なり 細 无アマ〻に妻思ふる…
物どもハ人よりまうらうへ
なうさらしえ
いふら給ハんとすらん 細 玉の女御の御事也 師 若君の御くハ源氏君御執して見えさせ給へ
この秋をみよりは 細 源氏八峯の秋也 源氏大将の風雨の時の歌などにて給ふ 住吉給ふ
御堂殿の例を撰ぶるや 同時の事なるべし 呼盃句
給ひ事どもあてしまへかれバいつれもしきこ流南
ぎるつゆて世中ゆとりてよ主アル庵ン人
視もくるとつくりまつり給ふゆうりしもの
のあり此人ぞ しのれいるつ こぞやそつ
へしまつるとこそ ほしさいひとあり
しよとさりをもりしきにまよ そりうさね
てもひとらうう舟まてあうてさりにし
まし 川なう給ひされバのへおりてかくで

ごんくもの 細 十列
細 今源抜頭しおはせ當石
見し給ひらへし舞花の あふ東遊の舞人
にみくらり 花東遊の舞人
十人こる上舞て装束ハおもを
ざりしとは物を見て神社
の御幸関白の装器をいひ
給ひしにあらじくは仕分ま
ていとみずく舞て其後ま
ゐ場立てあとをすらる
ありけるのへ八方右近衆の
官人ぞとをつとむ八幡深附
をみずにもて八庵に舞密群
人なり
さらぬ人も 細 世中ゆと
つぬらの大臣とさて ね金
あらしとと
ちく此あらさ庵と
源のあつさ庵のいらめく
及ぶらさとそてうつてて
が身のかど口ゆきさとと
く口ゆうしき うやうにたら
あきさ下もぞうま源につふ
るなわの色なーとさひら

給ひとのけらひるさき ゆらそけゆらさ
んざうらをりてつづけさらぶく人くると
づうれどさらそくと網へさらとえてハ
さうらぶまつらでまくるぞくをかめれバ内
さらさぶすらでまくるぞくそよめれバ
大臣殿の出乳をくしよまくでまとさぬ
人もありまつとそ いつうさ御とのがすぎ
まらーげよらしまーふ げよあさこまりう
月日をてもあれゆくこのありさ庵とそ
ふりまとてまつるよ身の程らちあらう
さ若ぶすげりけきれ そそしまつてねそ
くせるがうらく口をしきてのわれぞふ
物もひをげるてつるまつると ゑみしよ

また明石上ハうけたまハれなす
うせわらがおろかゝ侍のつ
ことふかくてよそよのこえ
つらとつくらん事ども
そひつけてたりけれさら
しもけり
うへのこゝろのこゝろざしをも
細 上古ハ位の階(ジン)浄振
の袍の色ハ濃(ノウ)淡(タン)あ
孟 紫もあかもみどり
も位によりて浅深あり
など云々 花同
むらさきも 細 せむかゆるり
くらきや殿上人ならぬも
色つゆふかきまよふとて
まろうへの
六位のあをき袍
細 あをきいろハ麹塵の袍なり
いかくど稀薦とて貴一
の六位の蔵人へ着る服の
旧ハ貴二の蔵人ハすでにこれ
どうまてあるもあらく
師 麹塵ハ山バトなる

いろふしに思ひたるになにのつみふかき身にてこゝ
ろにかけておぼつかなう思ひきこえつゝ
かゝりける御ひゞきをもしらでたち出
つらんなどおもひつゞくるにいとかなしう
て人しれずしほたれけり。松原のふかみどりなる(細 住吉の事也思ふべし)
中に花もみぢをこきちらしたるとみ
ゆるうへのきぬのこきうすき数しらず。
六位の中にも蔵人はあを色しるく見えて。
かの賀茂のみづがきうらみし右近のぞう(勘負之)
もゆげいになりてことごとしげなる随身(孟 勘負ハ随身)
具したる蔵人なり。よしきよもおなじすけ
にて人よりことにもの思ひなきけしきにて。

より 師 中河の紀伊守が方へ源の渡りへ行かひの間小山の比庿へまうでし折りて川つれ
て葵をかざしそのみをといへるし 花 斎院御禊よ一
貢後より人源氏の御供人つかうまつりしが勅勘の後
よりかへりて後又ゆげいの尉になりて六位の蔵
人也まうでよつかうまつるらし 師 靫負と八衛門の尉のこと
うしてもゆるされて
弄朱門の佐なるべし同とハ常のゆげいの蔵人のごとし
五位なれハ緋の衣をきるべし
ひきしきにかへ 細 記
の花やかさるべし
あかきぬ

おどろおどろしきあかきぬすがたいときよげ也。(細 延尉の佐也 / 細 赤衣 師 五位の袍之 / 師 良清ゆげひの佐なりける)
すべて見し人々ひきかへはなやかになに
ごと思ふらんと見えてうちちりたるに
わかやかなる上達部殿上人の我もと思ひいど
みむまくらなどまでかざりをとゝのへ
みがき給へるはいみじき見物にゐ中人も思へり(細 源の御車之)
御車をはるかに見やれば中々心やましくて。恋しき(孟 明石の上の心也)
えみたてまつらず。かはらのおとゞの御れい

ふくのくの 河 河原左大臣
同勅賜童随身事所見
未勘出 中右記云 御堂入
道殿令賜童随身 九条殿
例云々 花 長徳二年八月
九日御堂殿 于時左大臣 兼
左大将 同日以童六人為随
卯下三年十月九日勅賜左右

並大臣生名一人近衛各三人為随身但停童子云々今案ニハ随身みづらゆひて
ゆくらそれをごのりしゆひたりしをみえられども其装束の名目みえず
よろづ一やうにもあらねばさだかにしりがたし
しるし給ふ縫棲をとゝのへ 河海 御堂殿八六人とみえたり 細 河海
花鳥余情 うつくしげなるよし 河海物語の事にかよふなるべし以後
の河海物語のうちにあるべし
せり乗或説忠仁公向河原左大臣と号す一説河原忠仁公給童随身事
為国見たく又融公童随身給ふ事史にもみえず 一説河原
あるべし此物語の書ざまも一説

さけのこともののび
両童随身の事あり
ぶけまもり
是れうのつるの事あり
細 夕霧之八歳なるべし
源氏一の年生まれ給ふ
葵上の子なり 亀従
なり 花鳥同

童随身

をまねびて、わらはずいじんを給はりける、いとをかしげにさうぞき、みづら（髻也）ゆひてむらさきすそごのもとゆひなまめかしう、たけすがたとゝのひ、うつくしげにて、十人さまことに今めかしう見ゆ。大とのばらのわかぎみ、かぎりなくかしづきたてゝ、むまぞひ、わらはのほど、みなつくりあはせて

細 かいはれ
まち出るさまとみえたり人の
行末の事をさとりてものかく
おもふ事の及ぶまじき事にて
まいりつる所をとりわけたれ
ばさくにしろのうちをと
夕霧ハことにちかし
源氏のけ感光をとけ
れにたるべし

神にはもちられ 細 大臣の
とへ神もちられぬ
あるべし同前にハ
祈の神もちられべからず
細 かよはせけるにや
のかはりにかはり 弄同
さる人もよに
孟明公のしれしの地をくま
いらて源の御のすまし
まひそりけるそくひと
せんとの給へ

てやうかへてさうぞきわけたり。くもゐはるかにめでたく見ゆるにつけても、わかぎみ（娘君なり）のかずならぬさまにてものし給ふを、いみじくかなしと思ふ。いよいよ御やしろ（住吉の）のかたをおがみきこゆ。くにのかみ（摂津守なり）まゐりて、御まうけ（饗応）、れいの大臣などのまゐり給ふよりは、ことに世になくつかうまつりけんかし。いとはしたなければ、たちまじり、かずならぬ身の、いさゝかのことせんに、神も見いれ、かずまへ給ふべきにもあらず。かへらんにもなかぞらなり。けふはなにはに舟さしとめて、はらへをだにせんとて、こぎわたりぬ。

[illegible]

給ふ。まくらがみ御のまろしひあふべきこゝろ
ちりしてさうしきのほどらんかまくら
そへおりぐうさせてあそびのつまりめ
し給ふ惟光やうの人いふのくらま御乃ほ
とくと義にめでゝしきとちよするしき給ま
立出まつるはさあつひくまさてかぞくう
こし給けて世の人にいじれと切がし出て
もとこひけまかりしも地いふあのかれ御よの
あくるきしあきのあまひよ住吉のうらと
ばかりてむやりもさらいきうしありあかじのあ
もいとめでしうのありしの木に入れひとへ

[illegible]

こゝもされて色めかしきこともなかりければちり
ぎりけうし表よ見えしうみの流ちるへ
見えし出るもとりあしねいいてくろふ
流をうそことぞつ出ちてみおつくさあくや
あくまでさうらんしと見てすりやちろうち
まで所にきうえうとつくし流ちまえ
の流もろくあどころよるの瀬よしとやし
うつりまつり川ノえのきくうとを流らん
じてのまりて地なしあみはちうと流うろ
みるもあつくてうちまじまつるとは車のりと

祭ハ難波ニて天之眞名井の人ハ御衣をもちて解除す[illegible]難波の
らんの例ハ所近所の七瀬とハ[illegible]の七瀬ハ難波辛崎[illegible]
今まさに[illegible]難波なり 細 [illegible]の上を[illegible]
すらんとぞおもふ
きんこめしまやと 孟 打見出
ごんなきさんみさらり 河 打見
旅店筆硯をまうけ[illegible]
[illegible]硯紙を[illegible]すれ
[illegible]も甚術[illegible]
一 [illegible]
おほうの[illegible]紀
[illegible]筆[illegible]
あらうみ[illegible]
うらの東[illegible]て筆次
[illegible]の上へ消息
やしなひんとて[illegible]
ことつくし 河 國史云難波
江始立澪標之由[illegible]
甚[illegible]
土左日記[illegible]万葉[illegible]水尾
水咫衝石[illegible]流濡[illegible]
[illegible]
瀧 文選南都賦
識 太 識水行由也 [illegible]

ちらさられ[illegible]
[illegible]
[illegible]
海[illegible]
しと[illegible]
あ[illegible]
[illegible]

[illegible]江海の[illegible]
細 つ[illegible]
孟 源[illegible]
[illegible]難波[illegible]
[illegible]
[illegible]
細 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
夕[illegible]
河 難波[illegible]
[illegible]
[illegible]
つゆけさハ[illegible]
の[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
つゆけさの[illegible]

の僧のあやしくうれへて、みちのゆくへ[illegible]
わかきをうたそひのくちあへどかれ
かりハあきもらさてわかしやう。あらひ
たのつどひまうれらと。よき事ありときこゆる
れどしほらやうよしこのおもしけるかハされ
めくくめなくめり。されどいそやあらし
とも。物の哀もひとゞしそあへなれどの
めるかこと残さうよ思ひてしあなさうこま
よりめかハふとくむかうさうをあすこし物
とも思ひすまよ。とのがんをやりてよしめき
あやうもうとおそうれしかう。うの人。そ
をぐしきえてしかうさの日そよろしくり

きれハころくさそすまうが。行まつけさる親
どもをあすどうらくたうらしけり。又中らく物や
ひてそらでおあまられくちあしきさまを
さひあすけくいまや京まよおかつてうんと思
かまりそれへとはつひあり。此ごろの程
ままらんことそのほくる。いとさみしけり
げまうもとてまへのあふめれどいふやゆかきこゑま
こえうるれ中ぞうにか得きとうしくやあ
らんと思ひうづくよ。大殿はそこいでうれ
えんハいまうしろめてうさらうしてそうくうぐ
りれくもそくさむと物をもんまよ中らくさうし
くとのとしうろしあるきうろ所らけら。

入道右府云春宮の御事なり

可称也

細 御上なりても

まことや彼六条の御息所の

例の草子地也

六条の御息所也

源氏の昔より

細 源氏の心

六条の御息所

細 今も桐つぼ

六条のわたりや 盂 六条京京

御息所の旧居也 師 かくの

さやひらきて 河 婚 文選

閑麗也 閑暇 盟朋 朦

細 源のこゝろ

師 源の心

細 源のこゝろ 師 葵

六条御息遠例之

……ぐしき　好色より
うづもれ……八わたり……
……孟 斎宮の……
……へ……わたり……
……へまちつれゞ……

ぶしぬることぐし。
細 源の君志の程乃有様を
……そこてあらはし地を
……也 孟 ……の弘
源のさまゝて……ずしと
みをさ……給……り
とし後悔……
……まて 細 御息所
のみ 師を給まて源の
御ぬるし……わたし……給
[illegible]

ものこゝろぼそくおぼされければ、罪ふかき所に年へつるもいみじうおぼして、尼になり給ひぬ。大臣きゝ給ひて、かけかけしきすぢにはあらねど、猶さるかたの物をもきこえあはせ人に思ひきこえつるを、かくおぼしなりにけるがくちをしうおぼえ給へば、おどろきながらわたり給へり。あかずあはれなる御とぶらひきこえ給ふ。ちかき御まくらがみに御座よそひて、けうそくによりかゝりて、御かへりなどきこえ給ふも、いたうよわり給へるけはひなれば、たえぬこゝろざしのほどはえみえたてまつらでやと、くちをしうて、いみじうなき給ふ。

どいふ給ふ之（伊勢に居給ふ事）
源氏之
細 几帳なとしへだてゝのおまし
脇息也 六條息所病中ノ体之
源の心ねえ

の術のつくさひのうちに
されば御息所も甚よろしき
心わたくてとまり給ふ
源と斎宮の御息所の娘之
の御息所に給ふれてあり
まふてずとのおほく
今をしけ世中とものりて給ひ
……御息所 不合
ちのひ……給ひ 世の中と
やうく……やゝて御ゐ
別のわりんまでもそひ
さてまつりて……ひに
さりまで……
くちてまうさまて
かう御ことなくてだにる
細 源のわざうしそ給ふ
の達うらくも深慮ある
おしさにおほして御達長
のくいうおつに……ゑ
孟 御ことゝもなれ……

とゞめたりけるを、女もよろづにあはれにおぼして、斎宮の御ことをぞきこえ給ふ。心ぼそくてとまり給はんを、かならず事にふれてかずまへきこえ給へ。また見ゆづる人もなく、たぐひなき御ありさまになん。かひなき身ながらも、今しばし世中を思ひのどむるほどは、とざまかうざまに物をおぼししるまで見たてまつらんとこそ思ひ給へつれとても、きえいりつゝなき給ふ。かゝる御ことなくてだに、思ひはなちきこえさすべきにもあらぬを、ましてこゝろのおよばんにしたがひては、何ごともうしろみきこえんと思う給ふる。さらにうしろめたくなおもひきこえ給ひそなどきこえ給へば、いとかたきこと……

細 源の斎宮を数まへ
源の斎宮を数まへと也
御息所早下の頼之
源の心入と云

まくらようちかのゆへ
き　すこしあらため文
親ありても母親のなき
ハよろづさぶらふともよる
ふとまして源氏の作
人はゆるかハいりしなき
しく
なりてさかりに人めかえんは
細 源の上細よし給てく
つるく嫉妬しうじつり
の嫌疑もあへること
あらさまいとりとやう
源の解文り無類やあ
らんとなり
こゝ男とつくゐろふも
細 容かたちよくも知ねと
之 師 女ハ嫉妬なきの事
またこゝろのおもひを
そう柳が〳〵河息所の常
しなりすわうしく
なぐさめりしれ 師 孟文へ無

えんとれんとおもふなりしはしうしらめしうしふ
みてしまそあとこゝへまへいひいうしてさこ（河息不細之）
と海しとまちらさのむつさ地やえるでま
てこ無づくへふお女地やまえるれめられ
いと義でなかるはことめれまして地を
かしへめりさむようけくもあらさかくさ
りやうちましめんよろこもとあれに海
さむひとしそあらおもひやうしされどけて（河 娘の所れ上れ好色のみすなれづく）
さやまれ〳〵いてうもどうにや地へしきる乃（好色のうこえ）
こちと男をまつる作なるも女いおもひの頃か
めそなりの地りひとをそふう地まさん給
それにいでさうくことわれてしてきかれて

其のかすまて源のうろく
おもふまとまりありき
らく
年てゐまわり　細 源の作
へまうけてはなるゝ
思無も如来めれども
うしのやうにもあまことゝ
孟 むりしれてゝよもぎく
しらもわりしめしあり
そう源の色無之
かしとやとかわてて
りし故文やらしあいて
木下のりけちらのぞき
あかく
河 うしは故しけるに
細 此りのう尻の事
おり師 河息所が
下の木乃りそはまうゆあ
細 故 文わらへし孟故
文のようきむしを入之

こゝろそまうんとおもふなるにいかてあるへ
だにおひすよりの給ハれと地頭おとしく辞に（細 わらはさきへ 源の作之）
ろもろ河思ふまへおもりにのそらおもをも常の（ゆとおもひおもりのことく）
もとさんのなすごりまいなはよのこゝよまいひ
あさすをほいおくかへりなきのなう〳〵とて（細 あるハ名君なべきこと）（白）
とおしうかならうしらいも地頭とさうらふか（外之 そうしのさ無之）
のうゝよりのようとくゆるてこゝゆうとめし（源の方へをこそて〳〵無こ）
すやとも地頭てやいうしれ木下のかなと
うびよりことのすいはかたしるきこ河のわけ（大氣）
よれぐいとおうしげは若やしはみそき
てしうねまへるきはよりきことしうし海し
ていうらし義かう下の木地りてひそひ（ちやう）

けころ落ちりしひゞくる
細　あるひくてあるも今ら
ふうやうのから折りわう
へしいかやうるへむろをき
こじい衙里でありくもあへ
さくん　明一本　ひそびしとを
ひさやうかうんれ下のひの
る環かうし御あとゆさ
そし河ひるやり潜ハ字と
まく　盡をひやり
いくらうしさ海うり約
細河鼻席の纲く桜瘂乃
切れよりさ海かゞり

かすくそえるかゝんかしれ本根のあと
けふくひきやしれさうさうりれ　源のこ　おへくゞめそ
ことゞもしまへれぞつうつえはうそて
斉文のくるそ
いそ抱ゞれしとおぼいてうさ海かけりえ
うすれどいとくるしげまんとこ面れ
ぐのうちもうちほどうしらうさけえひ
あそよあさのきりのりしひらうりまあい
ぶやうづきくと海つるげなひをうくしあ
へいうろうりちうくゆりしるふるささつう
の給とれもしおばしくそいとらうし
海きり約くしけするさどをやうるう
とかしりをしへようしとうそうれ給らく

もうらうすしにいふうあらうおぼされてう
見ておそくふるやうかうらうしさつするれい
うるよおぼさるしやうとそのをとう給ふ見ぐこふ
　細河鼻席の纲く嘉みらるゝ
れハいうしおそらうしけは给やそうちこぞ
らのいとくうぶらうあわうしもわとこ
らとあへるるそ海くうちあうしれなん
　細　斉文のゆきかん
さひ給ふしとおうらもときてさせつれハ
　細　源の纲く
うりとをとつのかしくまんあしこらそし
　あしげん
さ世給うらは遥云のりうよおかりけるそ
いとど哀よかうん故従のこうつらうわきるさ
りのしまへとそさしくむろひおかすも
おぼしくうきさとうへのおうおしみそこうの

きかうわくそよのりしくまへ
源あるふとおりそうよいれ
みうかじうのうく
うらうれ遥云の
くやうよは遥云あかへき
へのきみりし源と河鼻
のあかえとしいうれるとさと
故従のみのううら
細　源の古御兄弟のうえ
とへのおふのゝうちとゝ宣の
淋象かと桐壷帝のれ
みくおかのくやうるよ姪や
しまうしうの源も安
まどと河兄弟とそうの

こゝろしめしてけり
おほかたもなかれは 細 源の宮河子もあま
さかりしかりしく
流 よるのし今に
細 御くよ素伝あつて
師日ろらはしくとくし
かのしらへてこり
ぜ八日ありて
細 源のうへり給て後七八
日ありてけり
とうくの事なかし
孟 葬礼なとのすこし
行法のわざ何角のす
さまなみ源の方より給
つゝはうちすく
あるさいえのこやつき
祢りぬあふ斎文のや
つまさなれはあるさと
いそり

しらよろずみ心き給しかば、さてそて
そのとき給しめきこしかなしきこさ 孟 源氏の君とられなからの事ともなし之
給ふなりぬ もひなどしておはふ
人もなかれはなくしきとおほきて
でくるまぬれとゝひいまもてうら
まかりてあらく給七八日ありてう
を給よくら。あへなう御目さうてよるし 源の之 せ
いとかうなくてこの御禰こゝろさはかされ
て内へと参り給つぞ。とかくのほどにとな 源参内もなき之
どとまてさせおふ。又さありき人々よこ 源より外之 捉
とよ出させたりかならこいとめのそや
づるなど。つうけるれさうぞうらく

ふましとも出けし侍して
あんと
細 祖父の御世けり 孟 ききうし
別時しとく
寺しさせの給ひとまし
細 源の祖父 抄 母御息所の
遺言のかすく
ひとつのけしありし此の
細 御息所へ八中より中
絶しるひしとうら
おかしんもなりしく
ものあやし源の母を恨思
ひしへりとく
てとりまめりしう
祖父のうへ源のうへ乃
うく程まりつせな
へ八祖父のうさいまめやし
うしろりとりく
こゝやみはつひとよとつひ
祖父へ細く源のうつ
ひしるみけり

よっしもきさめける 細 源の御むかしく 御前つかしもまさ
てまうりもやよかもとこうて給なれ 細 祖父なく 祖父の喪中之
ごとをかりて御しぞなむしと女別当し
てをとしまつり御てさとの給ひとまし
こゝも侍しとかはれ蒲なと給まかりの 祖父 かぞ
されむらむしくらんとくてあてんぐ 源の祖父とぶ
めしぞくあるべくそしたお給を給してとの 源の
りけよとは世のはとろまくらくし
いづうも世いとしめもうものわしぐう
むとあうかうまのとをまくり。あく 孟 内精進せ 細 源と
ぬよしらなぞをくはさうしかそ。み
抄 心喪のなたなるべし
そゆうしことてとこなさせ給ふものは

やうやうけしきばみ聞え給
おほかたの心も
斎宮まゐくだりまでのほどかさ
ねておなじ心のすゑもすゞろなる
今の源氏の君の御心をしはかる
おもふく
ほのめかし
源氏の人つねにさるべき
うちわたりぐしげなれど
致文よりいふに心
ありながら　細流息所
さしてさだまりたるひつる
ん也　師説云かの御息所
と細流には御息所のかたがた
御心のうちにもかの御息所より
またも斎宮の宮を
見給ふなんとも思しく
おもひやりまゐらせたり
さてそれとはかの事ともしれ
をも見給ふの御斎宮
いかにぞ
さしての
ことはおぼしめしたり　師
　　細
これ斎宮へのまゐりなり　服者

つねにまうでありきて給ふ。やうやうけしきばみ聞えたま
ておなじくはかくもしのびかたうおぼしたらぬ
つれなうおぼしつれどはかなう
うちあはれしらるゝの心まさりなり
されどゆゑありてこそおはすらめ、やは
よそのはかなうかゝりける人のあたり
らんとおぼしやりぬれはいかにか
まかれまさりなどいまのそれは
んどうらん
かくはそれほどなきをかきさまへの
まうけるもんやどもしき世の
うそのちうかりけるいとのめでたしや

人のほめよろしかりけりとしるらん
こゝろもとなきるゝとおもひやりけるや
なのにまたよかりけるとぞいかなれ
てかのおんうさとしてぞあるべきかは
びんのうそれいとようつくしかりけるよ
そのつゞきてまたきりして
そしぞてよかりそうつくしかりけり
またれもいかにしぬなりけるよ
うさまいていとおもしろきけり
ていかなうとらしけりおぼしそらか
そらよきやらぬ給しぬまでいうきを
おそくこそしとうけんらむけ

やかりしうれしかりて
孟秋八朝顔とれれまも人
くしかり師上にもそれ
をり師源のとりて
ろひてめとあかるれ
秘と身なる也

ろしうてよ
孟これ身それるも又妻
どうこれまでし　師上
白八は身にも然らばと
つて御もせまうかと清
やるせ世にあるぞ然うるとそ
うきうをむひし　花　秋之
ふらくのなり給しのかなる
ともしでおもはしく今ま
こなたまひ我なきを今人我
まじなり世よぬきうる宮
るれくは息所のしるあ
とげまのあまりと思ふ
しなてたつその比らしる

こゝもとからもおしはかりぬべくさぶらふ

めづらしきことハれいのなるやうにしておもしろく

そ、祇園息所のいにしへをしろしめしてけるぞ

よき給しをおもひやられど世中の人

をとらへらるゝにや、とくさうしたまふに

おもしろくおぼしてよくそありがたく

人〳〵のまねをして地主権しまうでさ

よろしき給なり、内ずさまかせたまふ

つまづきとまるやうにつかまつりて

地主にありつゝも給んでいとよ

ふるくしめしてまうさるゝかたはら

しるしたまへとて、大臣のかたへ

[illegible]

せ給ぐさうの事、いまたかくしてこそ

おもふことハかれ人のいもはひとりのこと

あはれうちに御そなへのためにとまうして

こゝろさしにしたがふてまうしたりける

うちに人をやりてこそまうさせたまふ

あはれ、女への給ひさしてうらみ給

おもひかへしたまひて人のこと

さられをしらぬかたのごとくおもひかへし

ぞせたまひて、このさうしをこのんでこれ

どもおもふことのあるべきにそうらひぬるは

つまりおもふところ給せらるゝかなとや

[illegible]

人〳〵の給ふ事、よくおもひしるにもそ

[illegible]

こゝをうくもおもはりぬべきぞうしと
おぼそよへれいのひそすへしいとおもしく
そ、称徳息女のいしうしろめとげよう
とる給しそどしつうれど世中の
きさめりよせびすりぬ、つきこしおとる
色とこふがんてゐぎてよくておろそひ
んぷんの事もそう地せ伝し
はなしを給ある、内ずるをうせ
つまそざるくあるまようしづござよ
おぼし、かる、ひともあやうるな給んども
こそしあそこえんをかりく
し給らう、けるこしと、共あん

おかしすどらへてげどきとしれりそる
世給ぐどろん、目いおうろうらもへこうるの
おくまへど、ちらすく物つらそ給ぶく
思ひろん、人ぶ西そ、目のつかも乃ろふあ
きうをそこ、ひろうろんいいしよりすくぞ
らうするくしくおかしれいへんぐもおの
まづらひそ、りのけんぐ西せられへ
おそり、女へでうつ、内給すどよ人へで、あ
きこれそうねわ、んどそりあぶうあ
ぞせおあんでおかりえんどしこの人へ
ぞおりよきのまじらひとそうせしそ
つらんよ人へよとより給まじうあらのそこ

うちとくへき
きやうよくうちみだしこさ
くみゆるとも好色の心や
まじりたんとく
うち也心もとくとめきこえたんハ
細それうちの心よりあり
やうらハかずとわが心をあ
らわれくけれハさらぬ
このすも人をあるに
給ふるや

山寺の入相
花 今案これも京出
るれ徳しるへし

うるはしくもあらぬとゝてしがれと見はてぬこと
うちとけへきはやくゆかしもや
ありさまわがけころもさこめかされ
だんかくもあるふてこと人よそもりし給
すずはわざるなくのけしきとりわたりて
きるせまへおりうちきけんにたるゝ人をよ
ろうひあつらせてくもぞうる月日まさへ
てふうちひしくうちつほそさとのき
まさりよさふん人でをやつくれ
ゆきあいしてたちつさのきやうく
まさりるればん人けしきよく山ちかの入相の
しよそへてものゝさきかうかく

奇なるものと歎きあひて
四触法の附叙子の例 眞本
れ巻まするなり

限りある命なくハ
細 例なきことなれど侍
侍一ハ異し給しうきを以
ほまハえうびひすへし給て
ね給しさとえ孟同
さふらふ人てよつけて
安家の女房みなよみけ
て新家ハり熱患しい
ひとりくしあるき

をかし給ひすくき御わかしく中
みえうきはのまも立たまれるてまつり
給ひて出すつりくそまのあて、新家よ
とおやそひくらでり給ふし人例、たまめ
ことけり給おれがらまつきるひ中の給
しれころよう人ぐうあうちうてたさ
がひきて給る人ちありめしと、むらゆうる
うゆがしうけきうきうふるふんへつ
つけて公りけ中て給人、さまいやしき
もあかさあかれれど中しくの口めしく
さいつようろまのせしうらしひきさい
ずしつまろあつなど、中やかうらの人

源の心也
細 御息所の御事也
抄 六条の京極の宮すん所の事也
細 六条京極辺
御息所の方へ
分散をいふ也
御息所の女房
源の新家の女房のもとへうらよい
まかうらん
おやめきてし

院よりおくらせ給ひ
孟 朱雀も秋好の御下向
の日別の御櫛さし給ひし
時より心まよはせ給ひし御思
のまどはれさせ給へるを
此絵あれば也
秋好なり 細 朱雀院の
御運拙之 おはしば秋好ハ朱
雀院の御一段のいはれにて
[illegible]のあまりある
ゆかしがらせ給へく
されどもやんごとなき
母后息所のゆへ 孟 歴々
の中にもあらはれさせ給ひし
[illegible]て秋の[illegible]
てなり也
[illegible] 細 朱雀
院の御[illegible] つまおかり
[illegible] 孟 朱乃
[illegible]

ど。のこるかぎり[illegible]あつめさせ給ふ。かくな
きこしめしつけられしとて[illegible]
つぶつぶと[illegible]ことのはずうけもさうらひつ
られ院みづからの[illegible]給ひし日、大極殿の
いはひの[illegible]しるしたる。ゆくすゑそ
[illegible]給しれ[illegible]ども[illegible]わすれがたく
[illegible]れば、秋の院なるとしれ[illegible]
のこやくおりしますくひいそ[illegible]
ましてこやうに[illegible]給ひさきれど
やむごとなきさんでうふ[illegible]給はりし
[illegible]てやしはしりつて[illegible]
いとあはれ[illegible]院も[illegible]

今は[illegible]して
秋は息所さへなくせねば
いよいよ[illegible]
[illegible]
[illegible]ていはん[illegible]
[illegible]
院よりみやこ[illegible]
孟 朱の[illegible]せらる
とひ[illegible]て。[illegible]
ア[illegible]て源の[illegible]
人の[illegible]
斎宮の[illegible] 細 よ
[illegible]江構
[illegible]
へたのみよ 孟 源の右[illegible]
へは院へ参く。斎[illegible]と
のさうく
[illegible]
秋 斎宮は息所のうへの[illegible]
[illegible]
[illegible]と源の[illegible]
[illegible]も[illegible]
[illegible]て源
を[illegible]

まこと院はやう[illegible]てそう
給しど。今はましてうれしかりけん
[illegible]ひ[illegible]給ふも。[illegible]
いて給をとりかへしほしくおぼして。院より
はそ[illegible]ありんど。ひきさかれ[illegible]給
まちはうじけるさく[illegible]への
はあらはのいとうらうらによ。[illegible]れさん
いまそうはしらうて又后のゑをすへて給はる。
うへのし[illegible]せんまるふ[illegible]。
ちくさやそれぞれてとしく[illegible]
かうさいよりのし給ひど。めいこまこを
さんまいらせてさうらふとも[illegible]。

まことゝさとくらおもりう
をおほつかなく八ミするよ
思ひきこえ給ひけめと云ひ
ありけり
秘文の御事と見ゆるよ
しの遠えどもてとさてハ
源も此斎宮の御事とれ
おろかならずありしとそ
おぼく此息所にて源ととを
ときうしろめたく源どう
さりのこと云ひおひ此息所
あはれとおぼすよみからさと
のあてかひ事とせよとて定め
つくへし
斎宮の世につけて 抄 云男の
身ようくらぬ人のうへを公
ぐらしおぼすやうにてされ
おほそし
おほそうなるをまことものにも
しらで 抄 此息所の出世の恨と
とくに後息所の身とハ思ふ給
さるとしろらんとおぼしく
由あり もとそとも云へこせ

うき身のよわりひとつれ侍めしと思ふへまた
(源の心まへ)いとおしう思すかゝこのよはめてそのうしろ
それもうしげをすぐ侍めしと、いまひとつ(つよき花をからうしく)
ありてのちはよこの秘文の御ことゝを申ん
(遠えおもひ)りのちもれしうば、(此息所の心を案して源の我かまへ)さもとらてとさこらゆよ
とのこともおぼくらをハさむすゆよくときこ
給けめと思すあり申も思ひさう御ほう
このよにつけてさまらうらう申しこと
ハさてもそぐされぬまさん侍をいりでゆ
きうけあそても(み)はなしきにさやうらうと
思すみるを内みとさそ申しうびさせ給
られどいとまさまされしらひよねう(御)

抄 冷の御かとすくハかたじけなれどいはけなくこれ幼年 かたじけなく
(斎宮の入内ありてもうらくと年十九斗)
よ秘さうしりのくわこれ人々もあるなれ
てもよくやくと思ひおかたをはさこ御ゆうり
あんとさそしおへぐ、(細 落葉の詞と)いとよう御こうり
なりと院(朱雀院也)かむおもかさんゝとさし、けよからうて
けなるかひとおしりくんなれど、みの此遠(けいでん)宮と
そらでもうびからよ来しくそうそてまつり
(朱雀院は此おほしきあはせ)
あるし。(細 朱雀院の御ことを)(此世のうらむ)いまゝことにやうのことわざことに御かゝ
しらずめぐて此とこうひかうはるり あらく
(孟 是より源の詞也)かうやのみ心ひ、かうりしも思ひしとかめじ
と思ふまかう、ざうくぞ此あともおありてかず

冷泉の御かどこの世の月と見え
此息所にうへとおもかるくに中寄
とおもわ(り)ける

みは申さ二言 ところして
孟 此息所の此年までも
こうけてありけり

(此の)ゆめ(細 中宮との)
冷へ入内のころよのあはれと云
朱のさのミ此梧桐(備へ)に
しかし
さらえ此秘文 細 源の詞也
りよわりがりのとつふ」

て後切ることもうとくへてつまほのめかさせ給ふ 師 此段は藤壺
斎宮の御事をひとへに源の御はからひにまかせ給ふよし

まへさせ給はゞもよほしばかりのことを
そふるになし侍らんとざまかうざまに思給へ
のこすことなきにかくまでさばかりの
心がまへもまねび侍るに世の人やいかにと
こそはゞかり侍れなどきこえ給ひて
のちにはげにしらぬやうにてこゝに
わたしてんと思す女君にもしか
なん思ふかたらひきこえて過し給はんにいとよき
ほどなるあはひならんと聞えしらせ
給へばうれしきことにおぼして

細 源の詞也 秋好の御事を ... 弄円
ことまでさばかりの ... 心がまへ
源の斎宮をむかへ給ふ
細 紫上也 二条院へ

御わたりのことをいそぎ給ふ入道の宮兵部卿の宮
の姫君をいつしかとかしづき
さはぎ給ふめるをおとゞのひまある中にて
いかゞもてなし給はんと心ぐるしく
おぼす権中納言の御むすめは弘徽殿の女御ときこ
ゆ大殿の御子にていとよそほしう
もてかしづき給ふうへもよき御あそび
がたきにおぼいたり宮の中の君もおなじほどに
おはすればうたてひゐなあそびの
心ちすべきをおとなしき御うしろみは
いとうれしかるべき御ことゝ思しのたまひ
てさる御けしき聞え給ひつゝ

斎宮の御入内の事を
冷泉院の女御にまいらせんのよし
細 頭中将也 弘徽殿 太政大臣
冷泉十一才弘徽殿十二才也
兵部卿の姫君 ... 源氏の猶子
入内の事を藤壺の御心にもよしとおぼす
孟 源氏の猶子にて入内

入内の事ハ藤壺の ... 細 源氏の君を
孟 ... 不快
細 紫上
晴 中納言の女を ...
細 兵部卿の宮の ... 雛
孟 ... 秋好の ...

いとのつくのさゆへし
細入依るのさすく孟述剣
からよ依れぞく
意ゝうへゆへしろひゞく
細流洞翁八円位も叶ゞし
くやうの八さくていのさす
ところおる恬要ハ内子を了ヌ
まさてへくうひあくねぞち
しら材とみさらくのれ
べみるとあるそきるそと為
堂の人中しふ批判ゆるを
るうに書のもとしるそ也

細川様とのへり
内記の

ろ川よむかいつくぬこし、すく思月やけ
どさの法ろしろをハさしまもいんぞ。わし
られようけくこ申ろるれなぞ八のいと哀
孟夜大蓮のくすき
よるて治をきのりしさりのまさひ送のし
あそいとあ川しくのとかいしまさば気
素内しきそさき之
てをあどしすハさくもんやちへさふらい
まふこともくてさこと。もうしおしなひく
そひさふらりんれうしろをハかるしむあら
べきしとなりきう